

鉄砲洲神社素読論語 解説

(平成 24 年 3 月 2 日)

郷党 第十

【一】孔子 郷党に於ては、恂恂如たり、言うこと能わざる者に似たり。其の宗廟朝廷に在りては、便便として言う、唯 謹むのみ。

孔子が郷里で周りの人達に話す時は、控え目で発言は口ごもって、静かな態度をとっている。郷里にあっては長幼の序を守って大人しくしていると風に捉えた方が良いでしょう。自分が活躍をする場、朝廷や御玉屋ではすらすらと発言をしている。ただ謹厳実直の態度は損なわず、すらすらと発言をされた。

公の場では、その立場にふさわしくすらすらと発言をするけれども、郷里においては、その他大勢の人のようにつつしみ深い態度をとっていた。

今風に言えば、首相が国会ですらすらと発言をしているけれども、自分の選挙区では、なるべく慎み深い態度をとっているとお考え下さい。でも今の政治家は大きな態度をとる人が多く、中々そのような人はいないようですが...

【二】朝にて下大夫と言うときは、侃侃如たり。上大夫と言うときは、誾誾如たり。君在すときは、蹶蹶如たり、与与如たり。

学者によって、下大夫の意味は、同僚・大臣・目下の人・下役の人と諸説あります。

朝廷で自分より下役の人に話をする時、穏やかな表情で話をしたけれども、自分と同格の上大夫（大臣達）と話をする時は、程々のつつしみ深い口調で話をしている。主君がおられる時は、恭しく、ひそやかにつつしみ深い態度をとっている。

自分より目下の人と話す時は、相手が緊張しないように穏やかな表情で和やかに話をし、同僚と話をする時には自由闊達に、ほどほどな話し方をする。主君がおられる時には、恭しい態度を崩すことは無かった。ごく自然にそのような態度がとれると捉えれば良いでしょう。

【三】君 召して擯せしむるときは、色 勃如たり、足 躩如たり。与に立つ所を揖するときは、手を左右にす。衣の前後、檐如たり。趨り進むときは、翼如たり。賓退くときは、必ず復命して曰く、賓 顧みずと。

主君が孔子を呼びだして接待役を申しつける時、孔子の顔色がサッと変わり、歩みもゆ

るゆるゆっくりためらう様な歩き方になる。その役を命じられた人達と一緒に立つ際、衣が揺れ動くけれど乱れない。「手を左右にす。」というのは右手側、左手側で役がそれぞれ違います。来賓が来られた時に、自分より右側の人には、来賓の意向を聞く役。左側の人には伝える役。役割分担をしっかりとわきまえて伝えないと失敗してしまう。礼にのっとり小走りをする時は、恭しくつつしみ深い態度をとる。

今の時代にあわせると、役割分担がしっかり出来ていない接待役が多いので、この辺りを参考にして頂けると良いかなと感じます。同僚と一緒にお客様の意向をお聞きして、実働部隊に伝えるという時は、掌（たなごころ）の如く意志が通じ合っていないと、このような動きは出来ないと思います。つい先頃、首相と自民党総裁との密談話は、同僚や下役が思うように動いてくれないと世間にみんな漏れ出してしまうというのは、情けない話だなと感じます。やはり大きな事をする時には、自分の意志を受け止め実行してくれて尚且つ口が固いという人でないと側近には使えないと思いますが、その様な人は中々いません。

来賓が帰られる時には最後まで見届けて、「お客様は位が高いので、その方が後ろを振りかえらないで、お帰りになりました」と、主君に報告をされた。当時の位の高い人は、帰る際に振りかえらず帰ったそうです。

二松学舎の元理事長から吉田茂元首相の話をお伺いしたのですが、吉田茂邸にお邪魔して帰る時に、玄関を出て振り返ってお辞儀をしたら、吉田茂さんはステッキをついて立っており、車に乗ってそろそろ見えなくなる所だなと思い、後ろを振り返ったら吉田茂さんは立ってずっと見送っておられ、その立ち姿を見た時どっと冷汗が出たという話を聞きました。位の高い人は、後ろを振りかえらないけれども、私の位はそんなに高くないので何気なく後ろを振りかえったら、見送って戴いていたので驚き、且つ冷汗が出たと説明をされました。でも大概の学者が説明をされる時は、「そうは言うけれども私は大概後ろを振りかえって御挨拶をしてしまうけれどもね」と言われます。

自分で気位が高いと思っている人は、後ろを振りかえって最後の挨拶をしない方が、たいしたものと言われるかも知れません。ただ、今の時代では通用しない話だとは思いますが。しかし論語の中にありますので御説明を申し上げます。